

更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐって

関根慶子

更級日記が回想のかたちをとった日記作品であるということには何人も異論はないであろう。しかしこの作品が、四十余年の長さを含みながら、讃岐典侍日記の二年未満とほぼ同量でしかないという事実は、いったい何を語っているのか。それはとりも直さず、作者がただ四十年の過去を追想し自伝的な日記を綴ったものではなく、一つの視点に凝集して四十年の過去を跡づけたものであることを語ってしよう。従って、叙述内容は選択され限定されて、ひとつの視点のもとに構想され統括されていることは、既に述べられている通りである。ただ、作者の構成力の弱さや和歌への愛着や自然美への愛好などが、その構想を際立たせない恨みはまぬがれ得ないけれども。

ではその一つの視点とか、構想とかいうのは何か。それはこの日記の終り近くに位置する文章、すなわち夫死後の述懐と、それと密接な関連をもつて語られる阿弥陀仏の夢の中に見いだされる。更級日記がこの晩年の心境を基点として生涯を回想していること、それがこの日記を統括する根幹となっていることは、既に近藤一氏らも述べられたところである。しかし、諸説の幾つかは、いわゆ

る述懐の部分を重視し、作者の筆勢たしかな阿弥陀仏の夢によって示される作者の信仰については極めて懐疑的なようである。だが両者は密接に結びついて語られているのであって、両者合せたものが作者晩年の心境であることはいうまでもない。以下に便宜上述懐の部分をもA、阿弥陀仏の夢の部分をもBとして引用するが、両者は別々のものではなく、続いているABの叙述を打って一丸としたものが作者晩年の心境であり、Bにその結論的なものを、私は見る。諸説に対して、私のそうした見解の相違を明らかにしようというのが本稿の主旨である。それについては、二十五年ほど前にも述べたことがあるが、ここに論考を全く新たにすることにより、その見解を一層明確にし、補強することができれば幸いである。

A 昔より、よしなき物語・歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび「稻荷よりたまふしるしの杉よ」とて投げいでられしを、いでしままに稻荷に詣でたらましかば、か

からずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じ奉れ」と見ゆる夢は、人の御乳母して内わたりにあり、帝・後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ、悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心うし。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどしてただよふ。

ここに挙げられる作者の過去にあつた四つのこと、すなわち、①物語や歌にのみ心酔して熱心な勤行もしなかつたこと、②第一回初瀬詣の際に見た稲荷のしるしの杉の夢、③「天照御神を念じ奉れ」の夢のこと（宮仕え関係）④作者の将来を予兆する、鏡にうつった影のこと（代参の僧の夢）、これらはそれぞれ、日記に既に置かれた記事を受けて語られているので、そこにこの作品における意図的構築は明らかに見られる。そして、作者の慨嘆は①②③④に関する喪失感・絶望感であり、それらと違って④のみの実現を嘆く。④は①②③の慨嘆に並列されるべき性質のものではなくて作者はここに①②③を顧みて、④すなわち悲喜両面の影のうち悲しい影のみが実現しているわが身を痛感するのである。「悲しげなりと見し鏡の影」こそはわが身を予兆するものであつたことを、今こそ作者は身にしみて悟つたのである。その叙述を受けて「かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人」と、作者は更に不如意の生涯を総括する。もつともこの詠嘆は、既に、宮仕えを一応退いた段階で「いくちたび水の田岸をつみしかは思ひしことのつゆもかなはぬ」の歎息に共通のものを感じられるが、今や、不如意の実感生涯を通じてのものゝと総括されているのである。そして現時点の作者は、「いとかかる

夢の世」を見、「功德もつくらずなどしてただよふ」という状態なのである。

しかし作者の筆はここで終らない。Aの文に密着して次の文章Bが続くことを見逃してはなるまい。

Bさすがに命はうきにも絶えずながらふれど、のちの世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏立ち給へり。さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに透きて見え給ふを、せめて絶え間に見奉れば、蓮花の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御丈六尺ばかりにて、金色に光りかがやき給ひて、御手、片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方には印をつくり給ひたるを、異人の目には見つけ奉らず、我一人見奉るに、さすがにいみじく、けおそろしければ、すだれのもと近くよりても見え奉らねば、仏「さは、この度はかへりて、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳ひとつにきこえて、人はえ聞きつけず、と見るに、うちおどろきたれば十四日なり。この夢ばかりぞ、のちの頼みとしかける。

ここで作者は、「ただよふ」生にも拘らず、命は長らえるようだが後の世も願うがままにならないのではないかと気がかりであるが、実は頼みに思うことが一つだけあるのだ、と言って、阿弥陀仏来迎の夢を語る。更級日記にある十一の夢の中で、これのみが年月日を附し、これのみが年月の順によらず、三年あとの夫死亡後の述懐の

終りに結びの如く置かれている。しかも再び念をおすが如くに「この夢ばかりその頼みとしける」と強い口調で結ぶのである。この事実は何人の目にも明らかであり、諸家も認めてきたところである。にも拘らず、諸説の中には、この夢の扱いを重要と認めながらもそのあとに「だが」・「しかしながら」等を附して、その夢の示す作者の信仰に不信感を表明される説は少なくない。以下その顯著な幾つかに再び耳を傾けよう。

近藤一一氏は、この夢の特別な扱ひ方に注目され、「作者が此の夢に、如何に重大な関心を寄せてゐたか——いや寄せようとしてゐたかは以上の諸點から十分に解せられる」と言われながらも、更に「だが、果して来世の救済を深く信ずる作者を我々は此所に見得るであらうか。成程この夢は源信僧都が描いたと言はれる聖衆来迎の図の如く美しい。まことにいぢらしくも純眞な夢ではある。迫り来る時代的不安の拡大と共に浄土教の信仰が生活的現実と身近かなものとして感じられてゐた平安末期といふ時代環境の中に於て見られた此の夢は、今日の我々が想像するよりも遙かに確実な未来世に対する約束を意味したかも知れない。にも拘らず、此の夢から安らかな信頼感と言ふよりも寧ろ逆にともするとふつと消えてしまふかも知れない夢の影像を、ひしと抱き続けようとする作者の心を感じるのには私だけの思ひ過ぎであらうか。

と述べられ、「その考は、最後の述懐を読むことによつて更に一層深められる。」としてAの文章を掲げて、作者の不幸感を縷々説かれて、それをもつて前説の裏付けとし、作者のこの夢を、結局「：

更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐつて

：夢い夢の影像を、ひしと抱き続けようとする」と結論づけられるようである。同氏の別稿⁽³⁾においても、この夢に関する見解が同様であることは当然で、作者の宗教意識を吟味して、「はかなくも美しいし、にひたむきに信頼しようとする」と説かれる。

秋山虔氏は、家永三郎氏の「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」に、作者の廻心を説く観方に反論し、「この作品を特定の時代の社会層におけるある一女性の所産としてその限りに即して考察する必要を感じず」として、家永氏がこの夢のあとにくる日記最後の記事を「つけたり」とすることを更に駁して、

もちろん阿弥陀仏来迎の夢は、家永氏もいはれるやうにこの日記中年号をしるした唯一の例であり、順序としてそれより後の夫俊通の死歿（康平二年）の記事よりのちにしるされてゐる程作者にとつては去り難く重大なものには違ひなかつたであらう。「この夢ばかりぞ後の頼み」としるされる所以である。しかしながらそのことから彼女がつひに「首尾よく来迎に乗じて安養に帰したであらう」と想像できるであらうか。むしろそれは彼女の紛るべくもない沈淪のなから想ひ観られる蠱惑の美形、そしてつひにそうだったのでないか。その境地は意志的に自己の現実的の諸關係を否定するところ、そのこと自体から開通解脱に到る底のものではなく、明瞭に陶醉的観想的所産にすぎないのである。

と言われ、そしてまた彼女の属する社会層・社会的動向などから、そこに絶対否定的な廻心の機縁を認め得ぬは蓋し当然である、とされる。

杉谷寿郎氏は、「天喜三年の阿弥陀仏来迎の夢を「後の頼み」とはするものの、現実においては、ただひたすらに「夢の世」となった誘因を自身の過去の人生のあり方に求め、悔恨している」と言われる。

無論これらのお説に聞くべきものはあろう。筆者も、作者が晩年にひたすら信仰の生活に安住した、と型の如くにいうならば同じでないのである。しかし如上の御論にも納得し難いふしがあるので、以下に私なりの考察を進めてみたい。

二

まず、作者の宗教意識についてみると、近藤氏も考察されたように、種々の仏を拝み、種々の寺に参籠した。また天照御神のことも再三記され、稻荷のことも見られ、おそらく、その他の神社にも参詣したのであろう。それは信仰と言えようなものではなく、当時の風習でもあり、八百よろづの神も仏も混在する信仰なき日本人の今も昔も変らぬ姿でもある。ただ作者は結婚後いささか仏道志向を示し、殊に大嘗会御禊の日の初瀬行などはその顕著なものではあるがこれとても現世利益に過ぎず、深い信仰などは見るべくもない。しかし作者は、少女の日から、源氏物語耽読のさ中に僧から警告される夢をみたり、二十六歳頃にも同様な僧の戒めを夢みるなど、仏道に無縁であり得ぬ性格が存したことは否定できない。こうしたことが誰にでも起り得るものではないし、作品としての造型がここにあるとしてもなお同じことを意味しよう。少女時代より物語や歌に熱中して、仏道にも意をとどめなかったが、ああした夢をみるところ

に宗教的素地を認める説も否定することはできない。それにしても時折の物語での記も、その殆どは道の記に費されていることは、近藤氏の論の通りであり、その間においても、彼女の深い真剣な信仰の経緯は辿るべくもない。かくて、結婚後は、

今は昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親のものへゐて参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積みあまるばかりにて、のちの世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の廿よ日石山にまゐる。

とあるように、物語の実現などを夢みた幻想はすてたにしても、今度は家庭を中心とする現世的営為に心を注ぎ、こうした状況は、次に記される初瀬詣での強行にも変りはなく、またそのあとも現世利益のため、遊山がてらの物語でに過ぎなかつたと見られる。

しかし、だからといって前掲のA・Bにおける作者晩年の心境もそのままであるという保証はどこにもないのである。不信仰の長い停迷の時期を経て、ようやく阿弥陀信仰に傾いて行き、天喜三年の阿弥陀来迎の夢となり、更に夫死去を契機として、作者の陥つた喪失感・無力感が媒介となつて、かの夢が信仰の確信となつたという過程は、十分想像し得るのではないか。Aの文章にその絶望感・喪失感・無力感がどうして覩られないのであろうか。近藤氏は、人間が絶対者に帰依随順するのは、現実生活における破綻・絶望、或はその魂が人間の無力感をしみじみ意識した時であるとされ——それは大体においてその通りであろうが——作者の場合そういうものが

何処にも認められないと言われる。そして、日記全体を通じて宗教意識には何等の深化も発展もない、とされる。そしてこの鶴方は同氏ばかりでなく、夢なるが故に「夢い」とされるのか。残念ながら作者は阿弥陀信仰にいたった経緯を諸家の納得されるような文に仕立ててはいない。だが、前述のような過程は想像し得るのであり、Aの文章をただ、一老後家の感傷とか不幸感とか悔恨とかにみなし、従って弥陀信仰をも、信仰ではないと断じ去ることが、どうして可能なのであろうか。

しかも、Aの文章において、「……おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」、「……いでしままに稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし」とあり、「もや」「や」とある所に、私は注目せざるを得ない。諸家は殆どこの「や」に意をとめておられないのであるが、私には始めからこの「や」が問題である。助詞一つでもゆるがせにはできないわけで、この「や」のもつニュアンスの受けとり方は、このBの文章の受けとり方に相当な関係を持つように思われる。殆どの論者は、ここを「……動行をしたならば、全くこんな夢の世を見ないでもすんだらう」、「……稲荷に参詣していたなら、こんなことにはならなかつたらう」というように解しておられる。だから、現在の不幸の原因を、昼夜熱心に動行をしなかつたこと、直ぐに稲荷に参詣しなかつたこと、という風に分析されるのである。

しかし私はこの「や」がやはり疑問の係助詞であって、「……こういう夢の世を見ないでもあつたらうか」、「こんなことにはならなかつたのだらうか」と疑問の形に放置していると考え、従って、こ

更級日記における阿弥陀の夢をめぐる

こで、せつせと動行をすればよかつたとか、すぐに稲荷に詣ればよかつたとか、の後悔を述べ、それに固執しているのだとは思われない。作者にとって重大なのは、この「夢の世」と観じている現実現在にこうある現実なのである。Aの更に前に夫の死を述べて「初瀬に鏡奉りしに、ふしまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は来し方もなかりき。今行く末はあべいやうもなし」と言い、Aでまた「悲しげなりと見し鏡の影のみ」的中したという現実認識なのである。かくてこの現実認識と「かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる」という回顧に、自己の無力感がしみじみ表白されていないと言えようか。ここになお「功德もつくらずなどしてただよふ」自己への絶望感が見られないであらうか。ここに作者の関心は弥陀信仰にこそ向つていよう。

筆者は、むしろ、家永氏が、作者の生涯と夫の死と阿弥陀仏の夢を通して、作者の彼岸信仰への廻心を認められた説を妥当と考えるものであるが、ただ氏の論陣が余りに堂々と一般論的なためか、作者の信仰が揺ぎない立派な悟道にいたり得たように解するとすればそれは当るまい。また「首尾よく来迎に応じて安養に帰したであらう」と言われるとき、そこまで決着させることはできまいし、作者は今、阿弥陀の彼岸を頼み信じて、此岸から望み見ている心境だと言いたい。なお、Bのあとに置かれた歌まじりの日記最後の記述をつけたりとされる点にも同じ得ないことは後述する。しかし氏が、Bの夢を通して更級日記作者の彼岸信仰を思想史上に位置づけられた点は当然でもあり、肯綮に價すると言つてよいのではあるまいか。

さて次に、A Bの時点において、神仏さまさまざまな信仰対象が混在していたという根拠はないのである。そもそも雑多な信仰対象があるなどということは、それが信仰ではない証左であり、作者も眞の信仰に到達しない時代に種々の仏神に詣ったのであった。作者の第一回初瀬詣の時には永承元年十月二十五日大嘗会の御禊の日に出発したのだから時期は明かであるが、そのあとで、

二三年、四五年へだてたることを、次第もなく書きつければ、やがてつづきたちたる修行者めきたれど、さにはあらず、年月へだたれる事也

と、ことわって、鞍馬(春ごろ、ついで十月)・石山・初瀬と物詣での記事が続いている。これは、この鞍馬参籠の前に、第一回石山詣で、第一回初瀬詣でと続いたあと、また鞍馬詣で……と物詣での記事が続けることの、読者を意識した弁解であり、寺廻りの修行者めいて見えよとの懸念から、やはり気ままな時折遊山半分の参詣であることを匂わせたものと思われる。従って二三年・四五年というのも無論正確ではなく、事実、第一回初瀬詣では「そのかへる年の」とあるから、第一回石山詣での翌年であり、矛盾していることは明らかである。要するに、修業者のそれではないと断っているに過ぎない。

さて第二回初瀬詣での記事のあとは、他の記事を少しはさんで、「世の中むつかしうおぼゆるころ、太秦にこもりたるに」とあつてうさ晴らしの太秦参籠のことがある。そのあと物詣での記事はなく

他の記事が続いて夫死後の述懐となるのである。第一回初瀬詣でから夫の死までは十二年、天喜三年の阿弥陀仏の夢までは九年を経過している。その間四つの物詣でが、どの年次にはまるべきかは全くわからない。が、その後、「……身の病いと重くなりて、心にまかせて物詣でなどせしこともえせずなりたれば、わくらばのたち出でも絶えて」とあつて、物詣でもできなくなった時期がある筈だが、その年次も知るすべがない。しかし、明らかなのは、天喜五年夫俊通の信濃守任官より若干年前に、作者の物詣では停止せざるを得なくなっていたという事実である。従つて作者晩年のA・Bの心境の中に雑多な仏神が混在したという証拠は何もないのではないか。それに、阿弥陀信仰に傾いてからも、当時の習俗や遊山がてらに他の寺社に詣でたとしても、あなたがち信仰の混在というには当るまい。だが、物詣での停止は作者四十代の後半であり、おそらくその前後から次第に阿弥陀信仰に傾き、天喜三年の夢となり、更に夫の死を契機として、これを「のちの頼み」とする確信にいたつたものではあるまいか。作者がその信仰の履歴書を詳しく示さなかったことがAの文から続いて阿弥陀来迎の夢をもって鮮やかに示されていると思われる作者の信仰を否定する根拠とはなり得ないのではなからうか。私にはむしろ、前述の通り、AからBに続いて行く文に、阿弥陀信仰への来歴がよみとれると思われる。

ここに最近、参考とすべき記事を偶然見つけた。「三善為康の浄土信仰」と題した記事(昭和五二年六月九日朝日新聞夕刊「研究ノート」速水侑氏)である。この記事によれば、為康の信仰は「四十九歳のとき夢に阿弥陀来迎をつけられて決定的になったという」と

あつたが、これはまさに更級作者の場合と全く同じではないのか。

三善為康ならばそうもあろうが、この作者では……というなら、全くとらわれた根拠のない考え方であり、信仰とは偉い人のものではなく、むしろ偉くないから、自分に絶望しているから、絶対他者に行くのである。三善為康には不遇の官人としての苦しい現実があつたという。為康と孝標女とは全く違う環境の中にあるが、孝標女の過去はどうあれ、夫の死に直面して「夢の世」と現実を観じ、何一つ思うにかなわなかつた悲しい自己に絶望している点では為康と共通する点があつたと言えよう。孝標女の場合は絶望ではないというなら、それは水かけ論に終る外ないが。絶対他力の信仰は、後の親鸞において最も徹底して深いものとなつたことはいうまでもないが、孝標女の時代は、源信の往生要集が出てから数十年を経ており、弥陀彼岸への信仰は広まりつつあつた時代で、三善為康より四十年ばかり先んじた近い時代に起つたことである。

そして、三善為康の夢の内容がどんなものだったのかは、目下私の知り得る所ではないが、更級日記作者の夢は、決して弥陀来迎の定型的図式によるものではなく、作者独自の生々しさを示していると思われる。この夢の中で、

……こと人の目には見つけ奉らず、我一人見奉るに、さすがに
けおそろしければ……（中略）……わが耳一つに聞えて、人は
え聞きつけずと見るに……

とあるが、これに対して近藤氏は、「何といういじらしい、いわけない信頼であろうか。五十年の生涯の最後に到達した信仰が之なのである。一人見奉る、人はえ聞きつけず、この一点に作者はこの夢

更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐって

の眞実をひしと抱こうとするのである。はかなくも美しいし、ひたむきに信頼しようとするのである」と言われる。しかし私はこれを「いわけない」とも「この一点に……ひしと……」とも「はかなくも美しいし」とも受けとることができない。むしろ作者が一對一で仏に対面した独自の信仰の消息が語られていると思うのである。こうなると、それは学問的争点とはなり得ず、読者それぞれの内面的経験の相違による受けとり方の相違というはかないかもしれない。

時代の影響や作者の性格から、この夢の示す作者の信仰も、観想的かつ幼想的なところはあつたであろう。しかし、物語や歌に執心している間も、何かしら宗教的な警告に接しながら、これを意にとめようとせず、好き好む所に従つていたという独特な経歴を持つ作者は、勤行や功德をつくるという信仰ではついに成就しなかつたが、彼岸信仰に独自の到達点を得たことは確かであろうと作品を通して私なりの考察を展開している積りである。

四

さて上掲Bの部分のあとに、

C 甥どもなどひと所にて朝夕見るに、かうあはれに悲しきことの
のちは、所々になりなごして、誰も見ゆることかたうあるに、
いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおぼえて
月もいのでやみにくれたるをばすてに何とてこよひ訪ねきつ
らむ（八四）

と続いて、更に四首の歌（作者詠三・他人詠一）を主とした夫なき

晩年の孤独の日常の断片をもって、日記は終わるのである。

日記最後のこの部分は、引用を略した部分も含めて、老境の孤愁をありのままに見せて、家集の断片のような散文であり、量にしてBの部分よりほんの少し長いという程度である。この部分を家永氏は「それはほんのつきたりに過ぎず」と言われたのであるが、秋山氏は、この「つきたり」こそ見落せないとして「夫なきのちの老後家のよりどころない寂寥と愁傷と危惧と惑乱とが切々と吐露されているではないか」と述べ、結局その故に、Bの部分を「……沈淪のなから想ひ観られる蠱惑の美形」、また「陶酔的観想的所産」と断じられた。

わたくしはCの部分に秋山氏の言われる寂寥とか愁傷とか沈淪というような要素がないとは言わないが、かるが故にBの部分に蠱惑の美形とか陶酔的観想的所産とか結論するわけに行かず、むしろ逆に、だからこそ作者は彼岸信仰にいたったものと考ええる。先にもふれたように、彼岸信仰とは、「安養に帰」するというようなことではなく、彼岸に望みを失った者が彼岸に頼むことであり、その頼みとは、現世的利益を頼むことではない。作者がBの部分で「のちの世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける」と言うのは、現世の幸福の原理、現世の経験で行けば「うしろめたき」にも拘らず頼むといふのであるから、後世には現世的期待と別のものを望むからこそ、頼むといふのである。

そしてAの部分の述懐は、過去の陶酔的姿勢をそのまま持っているものではなく、まず、物語や歌への心酔をここではっきり「よしなき」ことと観ており、その視点で過去を回想し、跡づけているこ

とは、源氏物語五十余巻を得て耽読し夕顔・浮舟を夢みたことを語ったくだけで「まづいとはかなくあさまし」と述懐したのを始めて、二十代前半あたりのそうした夢見心地を回顧し浮舟憧憬を語る所でも「かやうにそこはかとなきことを思ひ続けるを役にて」と言い、父不在中の太奏参籠・清水参籠にも、同様に「よしなしごと」と見え、結婚後の述懐でも物語思慕を「あなものをぐるほし。いかによしなかりける心なりと思ひしみはてて」と述べていることなどにより、明らかで、物語思慕の陶酔的心境を、よしなしごととする視点で、一貫して跡づけていることを指摘することができる。そしてこの種の叙述の最初である源氏五十余巻のくだけで「まづ」の語が用いられていることにも注意してよからう。わたくしはこの「まづ」の語をも見逃すわけには行かない。

かくて、物語や歌のことを「よしなし」ことと観ているのはこの晩年の執筆時の作者の心境で、作品はその視点で統一されていることが明確である。物語憧憬、浮舟憧憬のさなかに、それを、よしなきこと、あさましき、ゆくへなきことと感じているのではなく、むしろそれを「あまましごとにも思ひけり」であったのだ。さればAの心境・時点にある作者が、源氏五十余巻耽読・浮舟憧憬の過去と同じ姿勢をもって阿弥陀来迎の夢に向っているとはみられず、物語憧憬の過去と同じ「蠱惑の美形」とは到底断じられないのではな

いか。作者の阿弥陀信仰にはやはり幼想的なところがあつたであろう。しかし作者は従前の物語憧憬時代、物語で時代から一線を画して、それが今までの物語憧憬や物語でや現世的営為と違って、始めて信仰であつたことを観るべきではあるまいか。

作者の物語憧憬や中途半端な物語でや家庭の営為が、何れも「よしなき」「はかなき」「ゆくへなき」夢に終わったのに対して、これのみを眞実としたのであろう。それこそ「頼むこと一つ」、「これのみぞ後の頼み」と言わしめたものではないか。新約聖書へブライ人への手紙十一章一節に「信仰とは望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」（日本聖書協会訳）とあるのだが、信仰が肉体の目に見ていないことを事実として確信する点では、仏教にもキリスト教にも共通するものがある。

C以下の歌日記的断片は、右のような「頼むこと一つ」を持した凡婦の晩年の生きざまの断面として、その信仰に少しも矛盾するものではなく、むしろ当然な人生の夕暮の姿に過ぎず、それほど切々たる愁傷や感乱やの吐露とは観じられない。曾沢太吉氏の「更級日記新釈」の評では、秋山氏と対照的なものが見られて興味深い。すなわち、

夫と死別したばかりでなく、今迄一緒だった甥等とも別れて孤独な生活の日が来た。心も身も。今迄歩んで来た作者の人生に
とつて如何にもふさわしい晩年である。捨てられた姨捨山の老女は何といふ淡淡たる落着きと平静の命に生き得た事であらう。芝蘭の室に入った如く読む人の心にも静かな落着きを与へず⁽¹⁶⁾に置かない。

また、
平靜な結末である。もつとあつたと考へるよりさう考へない方がより正しいであらう。これ以上記してたとしてもこの結末以上の事は書き続けられなかったであらうから。それほどまでに

更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐる

作者の精神生活は落着きのある安心立命の境地であつたからである。生と死を超えた寂光の世界に静かな呼吸をあはせてゐる。疑はずに凡てを委せ切つた生活、人恋しの歌も素直に受けとれる。更級日記はこのなかに生ひ立つたのである。

と言われる。たしかに「……孤独な生活の日が来た」だけのことである。歌にすれば、あなるだけで、C以下の部分は、決してそれ程めそめそしたものではない。曾沢氏の全文に同感とまではいえないにしても、同氏が「何といふ淡淡たる落着きと平静の命」とか「平靜な結末」と言われることに、なるほどと肯かれるものがある。(八四)⁽¹⁶⁾の歌も、案外淡淡たる心境であるからこそ言えたことを認め得るのではないか。夫亡後散り散りになつて、さびしく残つた作者のもとに暗い晩、甥が訪ねてきたのは、当然めずらしいことであつた。こんなに暗い晩なのに老婆の所へ、よくまあきてくれた、と言つたところで、あたりまえではないか。人はとかく、老残というものイメージを先行させて、この箇所を観るのではあるまいか。下略した部分の歌に、「泣く泣く」とか「涙」とか「音のみぞ泣く」などと出てくるのであるが、これらは、当時の歌の普通の表現や技巧でもあるから、そうした認識も根底に必要なものではあるまいか。右にC以下の全文を挙げなかったので、詳しく説明できないがたしかに「淡淡」と言つてもいいようなありのままの叙述であり歌詠を楽しんでいる趣きにも見える部分である。とにかく、この部分が少しも作者の彼岸信仰を否定する資にはなり得ず、それが現世に残つた作者の生の場であり、そういう場所から、作者は彼岸を待ち望む姿勢にあるのだと考えられる。

注 (1) 近藤一一「更級日記構想論」(国語と国文学、昭和二六・

五)その他。

(2) 拙稿「更級日記における和歌への執着」(川瀬一馬博士古稀記念論文集に掲載の予定)

(3) 拙稿「更級日記私見」(日本文学教室、一九五一・二)

(4) 論文(1)

(5) 拙稿(3)

(6) 拙稿(3)でも諸説を参照したので、今回は「再び」となる。

(7) 論文(1)

(8) 近藤一一「更級日記の再吟味―その宗教意識について」(日本文学研究、昭和二四・八)

(9) 家永三郎著「上代仏教思想史研究」(昭和一六年刊、二五年改訂版所収)

(10) 秋山慶「更級日記についての小見」(国語と国文学、昭和二四・一〇)

(11) 杉谷寿郎「更級日記の構造」(語文、昭和四七・三)

(12) この「や」については、念のため、古代文法等に詳しい国語学者のご意見も伺ったが、疑問の係助詞として差支えないようである。

(13) 拙著「更級日記」(講談社学術文庫)の二四四頁以下へ参考参照。

(14) 「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」(著書9所収)

(15) 論文(8)

(16) 曾沢太吉「更級日記新釈」二九三頁。(昭和二四刊)

(17) 同二九六頁。

(18) 「月もいで」の歌の通し番号。

付記 引用した諸家のお説には、かなりの年月を経たものもあるの
で、若しその後の変更があったとしたら、ご海容を乞う次第で
ある。